

補完代替 CHOP 療法で完全寛解した猫の消化器型リンパ腫の1例

○大池三千男¹⁾

1) おおいけ動物病院

【はじめに】演者は、本学会において以下の症例報告を実施してきた。

2011年（平成23年）「高濃度ビタミンC点滴療法の犬への応用症例」（13症例）

2019年（令和元年）「ホモトキシコロジーで治療した犬の口唇の上皮向性皮膚型リンパ腫の1例」

2021年（令和3年）「ホモトキシコロジーで治療した骨髄異形性症候群から急性骨髄性白血病へ進行した犬の1例」

2022年（令和4年）「オゾン療法によりQOLの改善がみられた犬の心基底部腫瘍の1例」

今回、猫の消化器型リンパ腫の症例に、ビタミンC(C)、ホモトキシコロジー(H)、オゾン療法(O)を併用した「補完代替CHO療法」に、プレドニゾロン(P)を加えた「補完代替CHOP療法」を実施して、完全寛解を得たので報告する。

【症例】雑種猫、雌、避妊済み、5歳齢、体重4.48kg。元気消失、嘔吐、食欲不振で来院した。食餌は市販のドライフードを給餌していた。第1病日に腹部腫瘍を触知した。レントゲン検査とエコー検査で腹部腫瘍（7.8×3.5cm）を確認し、FNAを実施して、猫の消化器型リンパ腫（大細胞性）と診断した。飼主は抗がん剤治療を望まなかったため、「補完代替CHO療法」を開始した。酢酸リソングル100mℓを皮下輸液した部位に、(C)ビタミンC2gとビタミンB群（シーパラ）、グルタチオン500mgを混合し、皮下注射した。(H)ホモトキシコロジーは、Coenzyme compositum 1mℓとUbichinon compositum 1mℓを1週毎に、ParaBenzochinon-Injeel 1mℓとGlyoxal compositum 1mℓは交互に1週毎に皮下注射した。また、Lymphomyosot（1T sid）を経口投与した。(O)オゾン療法は、注腸法15μg/dℓ、20mℓを1週間毎に実施した。第14病日になっても、腫瘍の大きさに変化なく、食欲と元気もないため、第16病日から(P)プレドニゾロン（5mg、bid～sid～eod）を加え「補完代替CHOP療法」とした。オルビプロキサシン（23日間）も併用した。第42病日には腹部腫瘍は消失し、完全寛解した。その後の治療は約1～2週間毎に継続し、プレドニゾロンは漸減し、第497病日に中止し、第792病日に全ての治療を終了した。6年以上経過した現在も11歳生存中である。

【考察】猫の消化器型リンパ腫は、プレドニゾロン単独では、寛解は望めない疾患である。今回、予め「補完代替CHO療法」で導入し、後からプレドニゾロン(P)を加えて「補完代替CHOP療法」としたことが、他剤(CHO)との相乗効果で、リンパ系腫瘍に対するプレドニゾロン(P)の効果を高め、完全寛解に至ったと考えている。